

医療情報部

1. スタッフ

部長（教授）	小西 宏明
副部長（教授）	佐田 尚宏
看護師長	大柴 幸子
看護主任	大貫 紀子
事務	11名

2. 診療部の特徴

電子カルテも2年を超え、システム開発、運用ともに管理は安定期に入った。部内をシステム管理、診療情報管理、看護系、ヘルプデスクの4つに作業分担し、効率的な管理を行っている。

3. 活動内容、実績

2008年に行った病院情報システムの主な改修について解説する。

症状詳記システム

厚労省主導で決定したレセプトの電子化に伴い、当院でも対応を行った。症状詳記は医師個人のコンピュータにて作成されることが多かったが、診療録の一部としてJUMP上で入力が可能となった。これにより詳細なデータの記載（コピーなど）が容易になるとともに、患者情報が個人のパソコンに残るリスクを回避できる。

看護必要度評価システム

看護記録システムは医師カルテに先立ち稼働しており、2年を迎えた。運用も安定したため、記録内容の評価という段階に入った。紙ベースで行われていた記録監査がシステム化され、利便性が高まるだけでなく、評価内容が簡便に数値化され、看護記録の質の向上に寄与するものと考えられる。同様の取り組みは将来医師カルテについても行うべきものであり、システム導入の成果に注目したい。

当直管理システム

実に多くの職員が当直や宅直に従事している。それらの予定、実績を紙媒体にて管理してきたが、集計や重要事例の抽出に多大な労力がかかった。大学法人として進められている情報化推進計画の一環として本システムを立ち上げた。これにより当直予定、実績は端末から確認や入力が可能となり、最終集計から給与算定までが簡便に行えるようになった。本システムのもう一つの目的は特に医師の時間外労働の実態把握であ

る。過重労働が問題となる中、現状分析に繋げることを考えている。

4. 総括

2008年は運用面では安定期に入り、年2回の障害訓練を含めてシステム全体は盤石なものとなってきた。その実、システムの不備を運用で補ってくれる職員の協力の賜物であると感謝に堪えない。一方昨今では紙運用の時代を知る職員が激減し、障害訓練では紙運用に戸惑う事例が増加している。2009年以降より充実した紙運用研修が不可欠であろう。

2009年はこれまで蓄積している膨大な情報の活用に入りたい。特にDPCを中心とした病院経営に寄与するデータの抽出が急務と考える。環境の変化に対応する病院情報システムを目指したい。